

いっただん

ESSAY

倉元信行

12

11人の孫

私は4人兄弟の長男で、すぐ下の妹と弟二人はそれぞれ2学年ずつ離れている。生まれて間もないころは病弱で、しょっちゅう脱腸をおこし、医者にだめかもしれないと言われていたそうである。

おとなしくて人前に行くとき親の陰に隠れるような性格は、ちゃきちゃきした妹と比較され、男と女、入れ替わっていたら良かったのに、親は言っていたらしい。

内気であるが気が短く、怒りっぽかった。かっとして妹に飛び乗り腕を骨折させたという、思い出したくない記憶もある。

意識して直そうと努めてきた事が二つある。一つがこの気の短い性格で、かっとなった時すぐに言葉や態度に出さずに、じっくり考えようと努めてきた。

昔に比べればだいぶ良くなったような気がするのだが、思った事がすぐ顔に出るところをみるとまだまだ修行が足りない。

もう一つが姿勢である。小学校の時に先生から、前かがみに歩いているから背筋をしっかりと伸ばして歩きなさいと注意された。だから歩く時にはこの事を意識してかなり良くなったつもりでいた。

三年ほど前、風邪をひいて熱を出し病院に行った時の事である。診察室で医者の前の椅子に座ると、症状の事を聞かれる前に開口一番こう言われた。

「あなたは自分が今どんな姿勢で座っているか分かりますか。前かがみになって座っているでしょう。背筋を伸ばして座らなければ体に良くありません」

人の性格や癖は、気をつけてもなかなか直らないものである。

二人の弟も危うく命を落としそうになった事がある。

私が小学校1年生の時、母が一番下の弟を背負い、私の手を引いて汽車で博多の街に出かけた。

ちょっと買い物があるからここで待っていなさいと、博多駅の改札口の傍で母に言われ、私は買ってもらった漫画本を通路に座って読み始めた。

今の博多駅よりは少し北に位置していた旧駅の方である。

自雷也(じらいや)が大蝦蟇(ガマ)の上に乗って活躍する面白い話だった。三度くらいは読んだと思う。母がなかなか戻ってこない。

そのうち夕闇が迫り私が不安を覚えてキョロキョロしている、駅の職員が来て私の名前を確認した。

連れて行かれたのは病院であった。

駅の近くで、背負われていた弟の頭がカーブしてきた路面電車と接触したのである。その夜、父が医者に見せられたレントゲン写真には、クモの巣のようにひびが入った弟の頭蓋骨が写っていた。

しかし弟は助かった。未だ頭が柔らかかったから良かったのでしょうねとは医者言葉である。

戦闘機や戦闘ヘリの燃料タンクは“炭化ほう素”という人工のセラミックで覆われている。敵の弾が当たった時、このセラミックにひび割れが起きる事で弾のエネルギーを吸収し、タンクが弾で破壊されないようになっている。

弟の頭蓋骨はこのセラミックと同じ役目をし、ひび割れる事で電車との衝突エネルギーを吸収して脳を守ったのである。

上の弟は伯父に命を助けられた。

私たち家族は、母が事故に遭った時の福岡の家から、佐賀県の鳥栖(とす)市に移ってきていた。鳥栖には内科を開業している伯父(父の兄)が居て、父に近くの養鶏場の仕事を紹介してくれたのである。

やっと父は定職を得た。父はこの養鶏場で停年までの10数年、働く事が出来たのである。



想像だが、父は人間相手ではなく主に鶏という生き物相手の仕事だったから最後まで続けられたのではないだろうか。そういえば昔、父は犬が好きだった。

この伯父が新しいレントゲンの撮影機を購入し、その据え付けをした時の事である。伯父は試し撮りをやろうと、たまたま伯父の家の裏庭で遊んでいた弟をつかまえた。フィルムを現像して伯父はびびりした。弟の肺は大きく蝕まれていたのである。

すぐに弟は佐賀県中原にある結核療養所に入れられた。結局弟は2年後、この療養所内の学校で中学卒業を迎える事になる。

「あん時、哲ちゃん(弟のこと)がうちの庭をちよるちよるとらんやったら命は無かったばい」

この伯父が後に弟と私に言った言葉である。

父も伯父に助けられた一人である。

「お父さんがバイクでけがしたとよ、それが相手がおらんとばい」

温厚な母の珍しく怒ったような口調の第一声だった。

私は事故の相手が逃げたのかと思った。父は50ccのミニバイクで養鶏場との間を往復していた。

よく聞けば、父は酒を飲んでの帰り道に自ら側溝に突っ込んだのである。相手が居ないはずである。

母の口調は父に対するものだった。

病院に担ぎ込まれた父の左足は複雑骨折をしていた。私たちが駆けつけると、医者にはひざから切断すると言う。

この知らせを聞いた伯父が、切ったらもう仕事は出来んと、無理やり知り合いの久留米大学の先生のところへ移したのである。

そして何とか切らずにと頼み込み手術は成功した。

今も、父の足にはその時骨をつなぎ合わせた鉄板が入っている。

「焼いたら骨と一緒に鉄を拾うとけよ」と父は言う。

小さな頃からいろんな目に会ってきた家族である。四人の子供たちはこのような経験をしながら、それぞれの道を歩み育っていった。

80歳になる父と75歳の母は今では11人の孫持ちとなっている。